
酔いどれの夜に、
同僚と
酔いと熱がほどく、二人の境界線。
体験版
成人向け

# 酔いどれの夜に、同僚と

体験版

俺の名前は神崎 蓮。

二十九歳。営業。彼女なし。

特別どうということもない、普通のサラリーマンだ。朝は満員電車に揺られ、昼はコンビニの弁当か社食、夜は残業か付き合いの飲み。

休日は部屋で動画を見るか、たまにジムに行く程度。

特に不満があるわけでも、大きな夢があるわけでもない。

ただ、淡々と毎日をこなしている。

このまま大きな変化もなく、三十代を迎えるのだろうと、どこかで思っていた。

人生に刺激が足りない、なんて思ったこともあったが、結局はそのまま流されるように日々を過ごしていた。

変わり映えのしない毎日が、かえって安心だったのかもしれない。

何も起きないことが、安定だと錯覚していた。同じ課の深雪 沙羅は、俺よりひとつ下。

仕事ができる女、というのが第一印象だった。

声は低くて落ち着いていて、笑ってもどこか距離がある。

飲み会では普通に会話するけれど、それ以上の何かがあるとは、正直一度も思ったことがなかった。彼女はいつもきちっとしたスーツを着て、定時近くになると資料を丁寧にまとめて席を立つ。

無駄な私語をせず、必要なときだけ的確に意見を述べる。

会議で誰かが曖昧なことを言うと、静かに手を挙げて修正する。

その姿を見て、俺は「この人は自分の世界をきちんと持っている」と思っていた。

少なくとも、夜の街で肩を寄せ合うような相手だとは、想像したこともなかった。

彼女の私生活を想像したことすら、ほとんどなかった。

休日に何をしているのか、誰と会っているのか、そんなことを考えた記憶もない。

ただの同僚。それが、俺の中での彼女の立ち位置だった。

上司からも信頼が厚く、課の中では「深雪さんに聞けば間違いない」とまで言われる存在だった。それが崩れたのは、金曜日の夜だった。課の打ち上げは、駅前の居酒屋で始まった。

最初はビールで喉を潤し、次第に日本酒やハイボールがテーブルに並ぶ。

深雪は普段あまり飲まない印象だったが、その夜は不思議とグラスを空けていた。

頬がほんのり赤くなり、普段のクールな表情が少し緩んでいる。

誰かが冗談を言うたびに小さく笑い、俺の方をちらりと見ることがあった。

その視線が、いつもの仕事上の確認とは違う温度を持っていることに、俺は薄々気づいていた。

気のせいだと思いたかったが、視線が合うたびに胸の奥がざわついた。

酒のせいだ、と自分に言い聞かせながら、俺もグラスを傾けた。

周囲の笑い声が、かえって二人の間の空気を濃くしているように感じた。「神崎さん、今日は飲みますね」隣に座っていた深雪が、少し小さな声で言った。

# 体験版はここまでです

続きは製品版でお楽しみください。

本編には挿絵8枚を収録しています。